

# 初年次英語教育での学習習慣と意欲の喚起 —教員連携と学生の自主管理に向けて—

岡田礼子<sup>1</sup>・中山千佐子<sup>2</sup>・ジェイ・ヴィーンストラ<sup>3</sup>  
東海大学

## A First-Year English Program to Improve Study Habits and Motivation through Teacher Support and Learner Autonomy

Reiko OKADA・Chisako NAKAYAMA・Jay VEENSTRA  
Tokai University

This paper reports the result of changes made to a school program, which was established in April 2008, in order to improve the efficiency of teacher participation while maintaining learner study habits and motivation. An initial English language program was designed specifically for freshman students with the intention being any learner would eventually be able to give a presentation in English in his/her major. In order to achieve such a goal learners were provided with an abundance of support from instructors that would assist them with their study skills and desire to learn English. A questionnaire given to learners from the first semester offered at the university revealed that approximately 80% of the students learned new study habits, and over half became more motivated to study. Unfortunately, as the department continues to grow, it appeared difficult to continue to provide the same amount of support. As a result, in the following year a change that included the introduction of student cards into every English class was implemented in order to promote more learner autonomy with less instructor dependency while still maintaining motivation. This was followed by a questionnaire regarding the use of the student cards in the class and the students' reactions. Results indicated that changes in the program were generally received positively by the students and learner motivation was still maintained even though reliance on the teacher had lessened.

〔キーワード：初年次教育，英語教育，学習意欲，学習習慣，教員連携，自主性〕

### 1. はじめに

東海大学情報通信学部は、「情報通信技術のみではなく、英語コミュニケーション能力を身につけ・・・英語で研究発表ができる人材を育成することを目標に」（東海大学，2008），2008年4月，高輪キャンパスに1学年定員320名で開学した。英語そのものを専門分野としない学部において，英語教育を主要な柱のひとつとし，専門分野の教育の一部として高い目標を目指して教育することになり，他の学部にはない独自の指導体制を整えることが必要となった。さまざまな課題の中で一番の難題は，各セメスターに週3コマ（必修2コマ，選択1コマ）しか英語科目を開講できない，という時間割上の制約であった。「いかにして学生を本気で学習させ，学習効率を高めるか」が鍵となった。

そこでヒントを得たのが，従来の大学英語教育ではまだ広くは実施されていない次の2つの視点であった。(1)大学英語教育を4年間の修学期間全体という視点で指導する（嶋林，2005）。(2)

1 東海大学高輪教養教育センター reiokada@ttc.u-tokai.ac.jp

2 東海大学高輪教養教育センター nakayama@ttc.u-tokai.ac.jp

3 東海大学高輪教養教育センター jay\_veenstra@yahoo.com

各担当教員が一人で達成できることには限りがある (Nunan, 1987) が、授業を組織で運営し組織として教育することで効果的に指導できる (藤本, 2007)。

この考え方を元に、少ない時間で効率的に学習させながら、4年間を通して段階的に学習を積み重ねさせ、卒業時まで「自分の研究内容の概要を平易な英語で説明できること」を目標とし、専任・非常勤の全英語教員が密に連絡を取り合いながらチームで指導することを基本方針とした。

本稿では、情報通信学部初年度 (2008年度) と2年目 (2009年度) の1年次生第1 Semesterでの実践を報告し、初年次教育としての英語教育について提言する。

## 2. 2008年度の試み

4年後の卒業時の目標に向かってのスタートとなる第1 Semesterを「学習の土台作り」と位置づけ、以下の2点を指導の中心とした。

### (1) 学習習慣をつけさせる

少ない授業時間で学習効果を上げるには、授業時間外に学習させる必要がある。しかし、東京大学大学院政策研究センター (2007) の調査結果によると6割余りの学生は授業時間以外には1日1時間以下しか学習していない。そこで、学習習慣をつけさせる方法として全教員で次のことを行うことにした。

- (a) 宿題：毎回30分～1時間分の学習を宿題として与え、次の授業の始めに教員がそのチェックを行う。宿題を忘れた学生がやらないまま放置しないように、遅れても必ず課題を提出させる。
- (b) Webリスニング：80余りのリスニング教材をインターネット上に設置し、宿題用材料を豊富に準備する。自宅からアクセス可能にすることによって宿題の遂行率を高める。
- (c) ファイル整理：学習内容をきちんと整理させるために、すべての配布物をA4サイズに統一し、A4フォルダにファイルさせ、学習の積み重ねを習慣付ける。教員によるフォルダチェックも行う。
- (d) 欠席学生のケア：欠席のために落ちこぼれることがないように、欠席者には学習プリントを取りに来させ、出席学生と同様に提出させる。連続欠席者が報告された場合は、専任教員が掲示板にて呼び出す。

### (2) 学習意欲を持たせるための「わかる」指導

学習意欲が高い者の方が、学習効率が高く (亀田・金子・村上・伊藤・深尾, 2006)、学習内容が難しいと感じている学習者は学習意欲が低い (室井, 2006) という結果報告があるように、効率的に習得させるためには、「わかる」指導で学習意欲を持たせることがポイントとなる。そこで、以下のことを実施することにした。

- (a) 習熟度別小クラス編成：すべての学生にとって、難し過ぎず・易し過ぎない学習を与え、一人ひとりをきちんと指導できる環境を整えるために、全学生を8レベルに分割し、1クラスを約25名編成とする。クラス分けは、学期始めの統一テストによって行うが、レベルが合わないと教員が判断した場合は、学期半ばまでクラス変更を行う。教員は、学生の理解度を把握し、臨機応変に授業内容・速度を調整することに注意を払う。
- (b) 授業用プリント：各教員は、毎授業ごとに教科書の題材を担当レベル用に加工してプリントを作成する。学生に、学習した事をすべて紙に記録として残させ、学習の進み方を自覚させる。
- (c) 授業外サポート：各クラスの配布物は全英語教員が自由に閲覧できる状態に保管する。また、すべての英語授業 (非常勤教員の授業も含む) に関する質問・相談を専任教員が常時受け付け、欠席者には、学習の遅れを最小限に留めさせるために抜けた部分の指導を行う。

### 3. 2008 年度第 1 セメスターの結果

#### (1) アンケート結果

第 1 セメスター終了後に英語学習に関する無記名アンケートを実施した。その主な結果（有効回答数 281）は次のとおりであった（アンケートの全結果は付録 1 に記載）。

##### (a) 宿題

英語の宿題を「90%以上やった（40%）」と「70～89%やった（35%）」は合わせて 75%であった。そして英語の宿題が英語力の向上につながったと「大いに思う（15%）」と「少し思う（55%）」を合わせると 70%であった。

##### (b) 教材のファイル管理

プリントを英語専用の A4 フォルダにファイルした学生は、「全部ファイルした（72%）」または「時々した（11%）」の合計が 83%であった。ファイルした学生のうちの 78%が、ファイル整理は「大変よかった（34%）」、「少しよかった（44%）」と肯定的な回答をしており、その主な理由として、「復習しやすかった（48%）」「頭の整理ができた（38%）」「たくさん学習したことがわかり嬉しかった（11%）」（複数回答）と答えた。

##### (c) 学習時間

英語の学習時間が入学前と比べて、「大いに増えた（8%）」と「少し増えた（35%）」の合計が 43%であった。これをレベル別に見ると、上位レベルでは「大いに増えた」と「少し増えた」の合計が 27%であるのに対し、中位・下位では 45%～53%であった。

##### (d) レベル分け

自分が適切なレベルに入っていたと思うか、との質問に対し、「大いに思う（31%）」と「少し思う（38%）」の合計は 69%であった。下位レベルの学生に関しては、51%が「大いに思う」と答えており、中位・上位の回答（24～26%）の約 2 倍であった。

##### (e) 意欲

「入学前と比べて、英語のやる気に変化があったか」という問いに対し、「大いに増えた（14%）」と「少し増えた（41%）」で合計 55%であり、「少し減った」または「大いに減った」と答えた学生は、全体の 5%であった。また、「このまま大学で英語の学習を続けていけば、卒業時には英語力が向上していると思うか」という問いには、「大いに思う（17%）」と「少し思う（59%）」を合わせて 76%であった。

#### (2) 全学統一試験結果

セメスター最終週に、東海大学全学部対象の統一リスニング試験を行った。受験学生 281 名の平均点は、70 点満点の 38.68 点であった。

### 4. 2008 年度第 1 セメスターの検証

#### (1) 効果

「宿題をきちんとやった」「ファイルを整理した」と回答した学生の割合は共に 8 割前後であり、宿題については 7 割の学生が「英語力向上のために役立った」と評価している。またファイルを作ることがよかった理由としては「復習がしやすかった」「頭の整理ができた」が上位 2 位を占め、ファイルが課外学習に利用されていたことがわかる。このことから、多くの学生に学習習慣をつけさせ、それが学習に役立っていることを自覚させることができたと思われる。

また、約70%の学生がレベル分けの適切さを評価しており、難し過ぎず・易し過ぎない授業が展開できたと推測できる。55%の学生が「やる気が増えた」と感じている点は、私立大学の教員の約40%が学生の学習意欲がない問題に直面している現状(私立大学情報教育協会, 2007)と考え合わせると、評価できる結果と言えるであろう。

さらに、「このまま大学で英語の学習を続けていけば、卒業時には英語力が向上していると思う」という回答(76%)からは、意欲を持って大学の英語学習に向かおうとする気持ちが伝わり、組織での指導がよい方向へ向かっていることが感じられる。

## (2) 課題

ある程度の効果は感じられたものの、様々な課題も見えてきた。主要なものとして以下の4点があげられる。

第1に、専任教員がこの効果を得るためにかけた手間と時間が膨大であった点である。2008年度は初年度であったため学生は1学年のみであったが、翌年度から毎年約300人ずつの学生が増えていく。今後プログラムを円滑に進めるために、学生達に「自主的に」学習を続けさせる方法を計画することが必要と思われる。

第2に、学生数が増えるにしたがって非常勤教員の数も増加することから、少ない専任教員で、多くの非常勤教員と効率的に連携が取れる運営方法を開発しなければならない。

第3に、入学後の英語学習時間の増加を感じた学生の割合が、全体で5割弱、上位レベルに限ると3割弱にとどまったことである。さらに学習時間を増やす取り組みが必要である。

第4に、組織としての指導を根幹においたものの、教員間の指導法や評価のばらつきが一部にみられたことである。教員にはそれぞれ個性があり、それを生かしつつ、より効果的かつ公平な教育をするために、多角的な指導システムが必要と思われる。

## 5. 2009年度の取り組み

2008年度第1 Semesterでの経験を踏まえ、第2 Semesterでは2つの新しい試みを行った。いずれも継続による効果が期待されたため、2009年度新入生に対して本格的に導入した。

### (1) 1クラス2教員担当制

2008年度第1 Semesterでは、週2回の必修クラスをひとりの教員が担当していたが、2人の教員で担当すること(ペアティーチング)を試みた。その理由は、主に2つある。

第1に、英語学習は、細かいことを気にせずとにかく発話し、コミュニケーション能力を高める、ということが重要だが、同時に文法や構文を整理して学習することも欠かせない。しかしこの2種類の異なるアプローチをひとりの教員が運営するのは難しく、また、学生が混乱する恐れがある。そこで、教員Aは、おおまかに内容を把握することや、間違いを恐れずに発言することに重点を置いて指導し、教員Bは、じっくり構文を理解させ、正しく発信させる訓練をする、という役割分担をすればよいのではないかと考えた。これにより、2008年第1 Semester終了後の第4の課題であった「多角的な指導の必要性」が、解決できると考えた。評価の偏りも、複数で学生を評価することによって軽減されると考えられる。

第2に、Richards & Farrell(2005)が述べているように、チームティーティングは同僚との連帯感を生み出し、プロフェッショナル・ディベロップメントも促進する。個々の教員が指導しやすいだけでなく、組織での指導がしやすくなるわけである。チームティーティングにより、2008年第1 Semester終了後の第2の課題であった「教員間の効率的連携」が進められると考えた。

## (2) スチューデントカード (付録 3, 付録 4) の利用

「学生達に自主的に学習をさせる」「教員間の連携を円滑に行う」「学習時間を増やす」という3つの課題を解消する一環として、スチューデントカードを導入した。スチューデントカードは、和洋女子大学のリック・ロマンコ氏(Rick Romanko)が自身のクラスで使用していたカードをヒントに、筆者たちが東海大学高輪キャンパスの学生のニーズに合わせ改良を加えたものである。A5サイズのカードで、学生ひとりにつき1枚を作成する。表面は、写真欄と自己紹介欄になっており、裏面は出欠、Incomplete Homework 欄、Teacher Comments 欄となっている。

このカードの利用法は以下のとおりである。まず、学生は授業開始時に、教卓に並べられたカードから自分のものを受け取り着席する。教員は手元に残ったカードを見れば欠席者が一瞬で把握でき、点呼に要する時間を省くことができる。遅刻や欠席をするとカードにマークが記入され、学生は自分の出欠状況を授業の度に確認できる。同様に、宿題未提出や遅れての提出の場合にはIncomplete Homework 欄に記録が記入される。さらに Teacher Comments 欄は、授業中に積極的に発言した学生や、努力が見られた学生へのボーナスポイントの記録や、教員からのコメントの記入に使用される。小テストや課題の評価もこの欄に記入する。また、授業中に、携帯電話の使用やおしゃべりなど、授業態度に問題が見られた場合には改善を促すコメントが記入され、記録として残る。授業終了時には教員はカードを回収し、次回そのクラスを担当するペアの教員に渡して申し送りを行う。

このカード利用のメリットは多岐にわたっているが、その中でも、次の2点が2008年度第1 Semesterの課題の解決策になると思われる。

第1のメリットは、学生が出席状況や小テストの成績、平常点を常に自分でチェックできる点である。英語クラスでは、出席することと課題に積極的に取り組むことが、学習の重要なファクターであり、単位取得にも大きく関わってくる。カードを利用することにより、これらの情報を教員のみが一方的に所持するのではなく、学生も常時自分の現状を把握できるため、学生の自覚を促し、自主的学習による学習時間増加につながることを期待できる。

第2に、教員間の連携の効率化に役立つというメリットがある。大学では、それぞれの教員のスケジュールが異なるため、ペアティーチングの運営は難しい場合も多い。特に非常勤教員の割合が高い場合はなおさらである。しかしこのカードがあれば、同じ学生を担当する2人の教員が、お互いに必要な情報が一目で把握でき、パートナーに各学生の学習状況を伝える作業も非常に効率的に行うことができる。たった1,2分の受け渡しの時間で、多くの情報を交換することができる。また、専任教員は、自分が担当していない学生の出席状況や学習態度などのチェックを行うことができる。初年次教育では、欠席率が高い学生に早く気づき適切なケアをすることが非常に重要であるが、このカードの利用により、指導教員への連絡などの迅速な対応が可能になる。

また、付加的な効果として、Teacher Comments 欄の活用により、教員・学生の間コミュニケーションが生まれ学習効果が高まる、という長所がある。授業中の努力点(ボーナスポイント)が与えられることにより、学生の授業への集中度が高まり、モチベーションアップにつながることを期待でき、また反対に、授業態度の問題が見られる学生にも教員がコメントを書き込むため、学生の自覚を促すことができる。コメントがポジティブなものであれ、授業態度の改善を促すものであれ、学生は、教員が常に自分を見てくれているのだという意識を持つことができる。Dornyei(2001)が述べているように、学生と相互の信頼感を確立した教員は、そうでない教員に比べ、学習の場においても指導力が高まる。この信頼感を確立することは、初年次教育において非

常に重要であると思われる。

## 6. 2009 年度第 1 セメスターの結果

### (1) アンケート結果

2009 年 6 月（第 1 セメスター第 10 週）に、スチューデントカードに関する無記名アンケートを学生に実施した（有効回答数 306）。主な結果は以下のとおりであった（アンケートの全結果は付録 2 に記載）。

#### (a) 出欠のチェック

スチューデントカードに出欠状況が記載されることについて、「意味がある（57%）」または「少し意味がある（22%）」と回答した学生は合わせて 79%であった。

#### (b) 宿題提出のチェック

スチューデントカードに宿題提出状況が記載されることについて、「意味がある（54%）」または「少し意味がある（23%）」と回答した学生は、合計で 77%であった。

#### (c) コメントについて

スチューデントカードに教員がコメントを記入することについて、「意味がある（37%）」または「少し意味がある（18%）」と回答した学生の合計は、55%であった。

また、自由記述式で「コメントを書かれることについてどう思うか」の問いに対して、「やる気が出る・がんばれる・達成感」など、意欲につながるという意見を 40 名の学生から得た。また、「伝わる・わかる」など教員とのコミュニケーションが取れる点を述べた学生が 10 名いた。

その一方で、「コメントを書かれたことがない」と回答した学生が 30 名いた。

#### (d) 宿題提出率・学習時間

学習習慣がついているかの確認のため、宿題提出率と学習時間についても尋ねた。「宿題を 90%以上やった」学生の割合は約 65%（2008 年度は約 40%）であり、「70%～89%やった（22%）」と合わせると 87%であった（2008 年度は 75%）。また、学習時間が入学前と比べて「増えた（22%）」と「少し増えた（35%）」を合わせると 57%であった（2008 年度は 43%）。

### (2) 全学統一試験結果

セメスターの最終週に、東海大学全学部対象の統一リスニング試験を行った。受験学生 327 名の平均点は、70 点満点の 39.21 点であり、前年度比 0.53 ポイント上昇した。

### (3) 成績評価

学期末の成績評価は、2 教員で話し合っ行って行った。出講日が少ない非常勤教員との話し合いは、Eメールで行われ、ほとんどのペアが 10 回以上のメールのやり取りを行ったのち、最終決定の評価を提出した。そのため、2008 年度に見られたような担当教員による評価のばらつきは見られず、S 評価が非常に多いクラスや、統一試験未受験者の合否の違いなどは、見られなかった。

## 7. 2009 年度第 1 セメスターの検証

### (1) 効果

スチューデントカードに出欠状況および宿題提出状況が記載されることについて、8 割近くの学生が肯定的に答えている。これは、スチューデントカードにより各自で出欠管理と宿題提出管理ができることを有意義だと感じていることを意味する。また、宿題提出率および学習時間については、2008 年度より増加しており、宿題提出状況が一目でわかるスチューデントカードで、学

習の自己管理ができた学生が多くいた、と考えられる。この学習時間の増加と宿題提出率の増加が、学期末の全学統一試験の平均点のわずかな上昇（0.5点強）につながった、とも考えられる。

また、2 教員担当制を行ったことにより、セメスターを通して教員間で多くの話し合いが持たれ、指導法の研究や、学生とのコミュニケーションのとり方などの情報交換が行われ、教育の質の向上に役立った。

## (2) 課題

アンケートの Teacher Comments 欄に関する設問への自由コメント欄で、「がんばれる」「やる気が出る」「ボーナスポイントが嬉しい」などの肯定的なコメントが多く寄せられた一方、「あまり書かれたことがない」「もっとわかりやすく書いてほしい」というコメントもあった。教員による利用の差にばらつきがないよう、今後は Teacher Comments 欄のより効果的な活用法を全教員で話し合う必要があるであろう。また、2 教員担当制の効果について、具体的な検証ができる材料を得る必要性も感じられる。

## 8. まとめ

情報通信学部が目指す 4 年後の高い目標に向けてのスタートである第 1 セメスターで、英語を効果的・継続的に学習させる方法を探りながら開学から 2 学年の指導を行った。目標を「学習を習慣づけること」と「学習意欲を持たせること」と定め、宿題提出と出席の徹底、適切なレベル分けと学習の遅れの防止などに、組織で取り組むことを試みた。そのために、専任教員が行った作業と費やした時間は膨大であったが、それなりの効果があったと思われた。

2 年目に導入したスチューデントカードとペアティーチングにより、非常勤教員間でも積極的に連携をとることができるようになり、専任教員が学生のケアにかける時間の短縮化もできた。単位取得に大きく影響する「出席」と「宿題」を自主的に確認しようとする態度は、大学生として持つべき重要な姿勢であり、また、それが学習習慣を定着させる効果があると考えられ、大学生活の最初のセメスターに身につけさせることは大きな意味があると思われる。学習習慣が身に付いた 2 年生から 1 年生へよい影響が浸透しつつあることも感じられ、学部全体の学習意欲が上がってきていることが感じられる。

今後は、この英語プログラムで初年次の英語指導を受けた学生が、2 年次生、3 年次生になつてどのような成長を見せるのか、追跡調査を行い、検証を行なっていきたい。

## 参考文献

Dornyei, Z.(2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.

藤本元啓 (2007) 「学ぶ意欲を引き出すための組織的教育実践」『コミュニケーションニュース アップ』, 35, 東海大学教育支援センター, 2-6.

亀田健一・金子隆昌・村上周三・伊藤一秀・深尾 仁 (2006) 「学習環境におけるプロダクティビティ向上に関する研究 (その 13) 学習意欲, 学習効率に対する温熱環境の影響に関する現地実測」 ([http://www.arch.t-kougei.ac.jp/ito/pdf/14\\_2006.pdf](http://www.arch.t-kougei.ac.jp/ito/pdf/14_2006.pdf)) (2008 年 11 月 1 日閲覧)

Nunan, D.(1987) *The Teacher as Curriculum Developer: An Investigation of Curriculum Processes within the Adult Migrant English Program*. Macquarie University.

室井 明 (2006) 「やる気も双方で！」『英語教育』, 2006 年 1 月号, 14.

私立大学情報教育協会 (2007) 「平成 19 年度 私立大学教員の授業改善白書」『大学教育と情報』, 17(2) 社団法人 私立大学情報教育協会, 35-49.

Richards, J. C., & Farrell, T.S.C. (2005) *Professional Development for Language Teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.

嶋林昭治(2005) 「年間計画と詠えの大学英語教育」『英語教育』, 2005 年 4 月号, 33-35.

東海大学 (2008) 「情報通信学部の教育方針と教育目標」『授業要覧 2008 情報通信学部』, 9.

東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター (2007) 「2007 年全国大学生調査」 (http://daikai.p.u-tokyo.ac.jp/index.php?plugin=attach&refer=College%20Student%20Survey&openfile=CSStotal\_gt1\_updated.pdf) (2008 年 11 月 1 日閲覧)

付録 1 2008 年度第 1 セメスターアンケート結果 付録 2 2009 年度第 1 セメスターアンケート結果

1	あなたの受検形式は	一般/センター入試 34.6%	付属入試 50.5%	推薦入試 10.0%	AO入試 7.8%	専門学校入試 1.6%	
2	「英語リスニング」の毎回の課題をどのくらいやりましたか	80%以上 40.2%	70~80% 35.2%	50~60% 13.2%	30~40% 8.9%	30%未満 0.8%	
3	「英語リスニング」の課題をすることが英語力の向上につながったと思いますか	大いに思う 14.6%	少し思う 54.8%	あまり思わない 20.6%	全く思わない 2.8%	わからない 6.8%	
4	「英語リスニング」のプリントを専用のMフォルダにファイルしましたか	全部専用フォルダにファイルした 71.8%	上と下を専用フォルダにファイルした 10.7%	他の科目のプリントと一緒にファイルした 7.8%	ファイルしなかった 8.8%		
5	ファイルした人に質問です。ファイルすることはよかったですか	大変よかったです 33.8%	少しよかったです 44.1%	あまりよくなかった 8.0%	全くよくなかった 0.4%	わからない 9.3%	
6	ファイルすることがよくなった理由は？(複数回答可)	学習がしやすかった 47.9%	履が整理できた 37.9%	たくさん学習したことがわかりやすかった 11.4%	自分の上達がわかった 3.7%	その他: 15.1%	
7	ファイルをしなかった、あるいは「よくなかった」と思う理由は何ですか？(複数回答可)	面倒だった 11.7%	必要を感じなかった 6.9%	その他: 4.8%			
8	「英語リスニング」で新しい知識をどのくらい学びましたか	毎週 13.8%	ほぼ毎週 43.5%	たまに 34.7%	あまり 3.9%	全く 2.1%	
9	自分は適切なレベルのクラスに入っていると 思いますか	大いに思う	少し思う	あまり思わない	思わない	どちらとも 思えない	
		全体	30.8%	37.7%	18.7%	6.8%	9.3%
		上位	25.0%	38.9%	13.9%	11.1%	11.1%
		中上位	25.7%	50.1%	14.3%	2.9%	7.1%
		中下位	24.0%	41.3%	20.0%	6.3%	9.3%
下位	50.8%	19.0%	14.3%	6.3%	9.3%		
10	入学前と比べて英語の学習時間は	大いに増えた 8.2%	少し増えた 24.8%	変わらない 38.4%	少し減った 7.8%	大いに減った 10.7%	
	全体	8.2%	18.9%	40.8%	8.9%	23.9%	
	上位	8.9%	38.4%	39.4%	6.8%	7.0%	
	中上位	8.2%	40.0%	38.0%	14.7%	4.0%	
	中下位	8.2%	42.9%	38.1%	1.8%	7.9%	
11	10番の理由は?	理由:					
12	入学前と比べて英語のやる気が	大いに増えた 13.8%	少し増えた 40.6%	変わらない 38.9%	少し減った 2.6%	大いに減った 2.1%	
13	12番の理由は?	理由:					
14	このまま大学の授業で英語の学習を続けていけば、卒業時には英語力が向上していると思いますか	大いに思う 16.7%	少し思う 58.7%	あまり思わない 18.1%	全く思わない 2.8%	わからない 8.0%	
15	英語で毎週海外学習をしたことで、他の科目も海外学習をするようになりましたか	大いに思う 3.8%	少し思う 24.9%	あまり思わない 48.3%	全く思わない 6.0%	わからない 17.1%	

あなたの出席状況はどうですか。	良い 98.8%	やや良い 99.8%	どちらとも 思えない 2.8%	やや悪い 4.8%	悪い 6.8%
宿題などの課題をやっていますか。	99.8%以上 95.8%	70~90% 22.8%	50~60% 2.8%	30~40% 3.8%	30%未満 2.8%
入学前と比べて英語の学習時間は	増えた 22.8%	少し増えた 34.8%	変わらない 34.7%	少し減った 6.8%	減った 7.8%
Student Cardで出席中程度の状況が把握できますが、このカードについて書いてください。					
出席のチェックができることについて	意味がある 61.8%	少し意味がある 31.8%	どちらとも 思えない 14.7%	やや意味がない 3.8%	意味がない 2.8%
理由					
宿題のチェックができることについて	意味がある 81.7%	少し意味がある 22.8%	どちらとも 思えない 17.3%	やや意味がない 2.8%	意味がない 2.8%
理由					
コメントを参考にすることについて	意味がある 37.8%	少し意味がある 18.8%	どちらとも 思えない 31.8%	やや意味がない 6.8%	意味がない 5.8%
理由					

(本文では小数点以下を四捨五入した数値を用いた)

付録 3 スチューデントカード記入例 (表)

## 写真

All About Me!!

1- My favorite sport is baseball. I am a pitcher.  
I like to watch movies.  
My favorite movie is LEON.  
My dream is to be an engineer for SONY!  
I have 4 people in my family. My parents, my younger sister and me.  
I am a little bit shy, but I will try my best in this class. I know English is important for my future!

Hideki Yamamoto  
First and Last Name in English

8ADA3929  
Student Number

Email Address (Please write an address that you check regularly)

(個人情報保護の観点から、架空の学生カードを記載する)

付録 4 スチューデントカード記入例 (裏)

Teacher Comments

9/22 = Great effort today. You finished first many times!

9/19 = Great sleep in class!

9/15 = Great! Great poster!

9/12 = Do you have your homework why not? Be back about English!

9/8 = If you don't participate in class you will not improve!

9/4 = Great work with your partner! Congratulations! Thank you!

9/1 = Great! Great! When the teacher is talking!

7/31 = First time! Well done!

7/27 = Sleepy head. Not in class!

Takanawa - LISTENING

Score		Attendance Management	
1 Lesson =	100%	9/19	Present
2 Lesson =	100%	9/18	Present
3 Lesson =	100%	9/17	Present
4 Lesson =	100%	9/16	Present
5 Lesson =	100%	9/15	Present
6 Lesson =	100%	9/14	Present
7 Lesson =	100%	9/13	Present
8 Lesson =	100%	9/12	Present

Attendance

Safe

You're OUT of here!